

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）の言葉を掲載いたします。

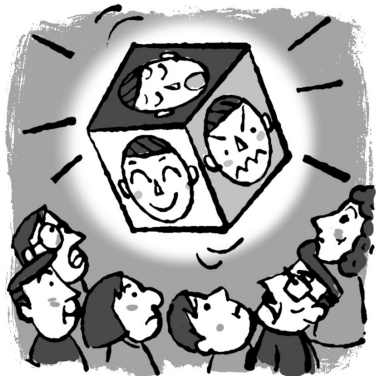
よく分かっていることだが、それでいて、しばしば引つかかるひとつに、ある一面だけを見て、全部がそうだと思いついてしまふ問題がある。

人あたりがよく、ニコニコしているのに、いつもそうかと思ったら、家に帰ったら黙りこくりに難しい顔をしているといった例がある。これなどはよくあるのでやたらに誤りはしないだろうが、それでももうっかりすると速断しかねない。

めったに奢ったりはしない。一円、五円という計算がやかましい。周りの人にけちん坊だと思われている人があった。ところが、亡くなった後で分かったことだが、少しずつの金をため、毎年匿名で福祉施設に寄付をしていたのであった。それを知った人々は頭を下げたという。

逆に金づかいのさばさばしている人が、そうした寄付をほとんどしなかったりする。金銭の面だけを見ても、人の生活はこうしているという複雑多様である。

要は、一口に人の性格とか人柄とかいっても、きわめて多様で複雑な綾をなしているところがあるのだから、ある一面だけを見て、その人がすべてその通りと見なし、ちやほやしたり、買いかぶったり、逆に非難したり、責めさいなんたりするのは危険であると知りたい。しかし、このように「一



思い込みを捨てる

丸山竹秋

面だけを見て全体と錯覚する誤謬」は日常生活にたえず生じやすいので、注意が必要だ。親に対し、子供に対し、あるいは夫や妻に、そうした誤謬が毎日繰り返されていくのではなからうか。

人数が多くなったりすると、そうした誤謬にいつそう陥りやすくなる。あの人はこうだからダメなんだと一人が言い出すと、そうだと付和雷同する。実際にはよい面が他にたくさんあり、またその指摘と反対のところもあると知ってはいるのに、そっちのほうはぼやけてしまい「そうだ、そうだ」とすべてが悪いように見えてしまふやすい。群集心理は、時に人の評価を誤ったり、まれには残酷な罪つくりに至るまでし向けたりすることがあるから恐ろしい。

一部が悪いと社会体制すべてが悪いと思いつく。反対に一部よいとすべてよいと思いつく。そして不満が昂じたり、有頂天になつたりする。それだけの個人的問題で済めばよいが、大勢になると過激な行動に出たり、関係のない人の幸福まで奪つたりする悲劇も生む。体制維持の運動とか反体制活動といつても、共にこうした誤謬の上には立たないよう努めるべきであることはいくらでもない。各々長所も短所もあるのだから、自分で「ここはこう」と検討し、はっきりと取捨するのが正しい。

感情的になり、すべてをきめつける。全体であると思いつく。私たちの日常にはこうしたことが多くあるのではなからうか。

『繁栄の法則』より